



福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum



キラキラ☆チカチカ ― 光のアート Glow! Shine! Flicker ― The Art of Light



2012年1月2日(月)－4月3日(火)

アジアギャラリーA

「光」をどう可視化するのか、あるいは「光」の効果をどのように作品に取り込むのかは、いつの時代もアーティストにとって大きな関心事でした。いいかえれば、前者においては光に神秘的・象徴的な意味づけが試みられ、後者では光の視覚的・劇的な効果が探求されたといえるでしょう。また、ひるがえって現代社会を見てみると、私たちを取りまく世界はもはや自然光ばかりではなく、都市は人工の光に彩られ、それが無い生活は考えられません。

ここで紹介する作品は、どれも光に着目したり、光の効果を取り込んだ作品ですが、その手法はさまざまです。今回の展示作品では最大で、パキスタンの職人たちの手を借りて完成した《ハート・マハル》、そしてスリランカの伝統舞踊に着想した《先祖の衣装》は、どちらも電飾を用いた作品ですが、それ以外にも南アジアの大衆文化に根ざしている点、またそれを支える職人たちの手業や伝統が取り込まれている点で共通しています。

これに対し、より現代的なテクノロジーを利用したといえるのがライトボックス(電照板)型の作品です。これらの作品では写真をそのまま利用したり、《何というベールだ!》や《三民主義統一》のように、コンピューターによって加工したイメージを、強烈な人工の光にのせて私たちの網膜に届けます。

以上の作品はどれも電気による人工的な光を直接利用したものですが、ほかにも、《火》のように間接的に光を取り込んだ作品、《ヤントラ》や《花火》のように絵画やビデオというメディアを通して、光そのものに着目した作品も展示しています。『キラキラ☆チカチカ―光のアート』では、こうした様々な作品による光の競演をお楽しみ下さい。

グラーム・ラスール・サントーシュ
「ヤントラ」 1982年 油彩・画布

ドゥリヤ・カーズィー、デイヴィッド・エルスワース、
イフティハール・ダーディー、エリザベス・ダーディー
「ハート・マハル」 1996年
金属板、トラックバンパー、鏡、照明ほか

ベート・ヨッククアン(麦毓権)
「火」 1992 銅ほか

キム・ソンヨン
「花火」 2006年 ビデオ(4分57秒)

パラ・ポトゥピティア
「先祖の衣装1」 2002年
ファイバーグラス、ひも、木、プラスチック、布、ガラス

パラ・ポトゥピティア
「先祖の衣装2」 2002年
ファイバーグラス、ひも、木、プラスチック、布、ガラス

パラ・ポトゥピティア
「先祖の衣装3」 2004年
ファイバーグラス、ひも、木、プラスチック、布、ライトなど

イフティハール・ダーディー
「肉を食べるイスラム教徒は塩辛いものが好き、
一方ヒンズー教徒は甘いものが好き」1997年
インクジェットプリント・透明フィルム、ライトボックス

イフティハール・ダーディー
「何というベールだ!」 1997年
インクジェットプリント・透明フィルム、ライトボックス

イユム
「生きている彫刻」 1996年
プラスチック、フィルム、ライトボックスほか

ボン・ホンヂィ(彭弘智)「1匹のラッシー」
2000年 チバクローム・プリント、ライトボックス

ボン・ホンヂィ(彭弘智)「1匹のダルメシアン」
2000年 チバクローム・プリント、ライトボックス

ボン・ホンヂィ(彭弘智)「故郷に錦を飾る 5」
2001年 ビデオ(VCD) 1分1秒

メイ・ディンイー(梅丁衍)「三民主義統一中国」
1991年 アクリル板・ライトボックス

